

末摘花

平安美意識の表れ

『源氏物語』で最も醜い女性

- 落胆・失望する光源氏



- 当時の美人の条件とは正反対

作者・紫式部

- 理想からほど遠く造形
- ⇒ 平安時代の美意識が浮き彫りに

内面の美しさ



純真で一途な心

- 引っ込み思案で言葉のやりとり苦手
- 光源氏への想いを胸に秘める
- ⇒次第に末摘花を気にかける光源氏

須磨から都に戻った光源氏

- 信じて待っていた末摘花
- ⇒ 光源氏は深く心打たれる

没落貴族から光源氏の妻へ

不遇の境遇

- 若くして父を亡くし、経済的苦境に
- あばら家で過ごし、教養を磨けず



心の美しさ

- 一途で変わらぬ想い
- ⇒ 光源氏の心をつかみ妻となる

二条東院での生活

- 時折奇抜な和歌、物語を読むなど
- 光源氏と穏やかな日々を過ごす